

Ratnarakṣita 著 *Padminī* 第 1 章傍論

— Preliminary Edition および註 —¹

種村隆元・加納和雄・倉西憲一

はじめに

筆者は『川崎大師教学研究所紀要』創刊号において、Ratnarakṣita 著 *Padminī* 第 1 章前半のサンスクリット語校訂テキストおよび註を発表した²。今回、本論文が提示するものは、それに引き続く箇所のサンスクリット語校訂テキストおよび註である。

Padminī 第 1 章前半において、Ratnarakṣita は註釈対象である *Samvarodayatantra* 序文全体の意味の解釈を提示し（総義）、引き続き序文の逐語的解釈を第一義的な解釈と秘儀的な解釈に分けて行っている。この序文の逐語的解釈の中で、Ratnarakṣita は世尊持金剛が果タントラ (phalatantra) であることを述べているが、それをうけて、第 1 章の後半では果としての持金剛位に関して、対論者との議論が展開されることになる。この持金剛位に関する議論は、下に示した *Padminī* 第 1 章全体のシノプシスでは「C 傍論」にあたる。

- 帰敬偈
- 総義
- 各義

¹ Preliminary edition を作成するにあたり、苫米地等流 (人文情報学研究所), Diwakar ACHARYA (オックスフォード大学), Somdev VASUDEVA (京都大学), 横地優子 (京都大学), 宮崎泉 (京都大学) の各先生から貴重なご意見を賜った。ここに謝意を表します。(当然のことながら、本論文のいかなる誤りも筆者自身が責任を負うものである。)

² 種村・加納・倉西 2016a。また当該校訂テキストにもとづく訳註研究も発表している (2016b)。

A 経序

B 経序別解

C 傍論：持金剛位 (vajradharatva) をめぐる議論

D タントラ全体の要義の解説

それでは、校訂テキストおよび註を提示する前に、持金剛位をめぐる議論の概要を見ていくことにしたい。

持金剛位をめぐる議論の概要

前述の通り、対論者の論難は、Ratnarakṣita が持金剛が果タントラであることを受けて開始される³。対論者自身は明言していないが、その論難の背景には、*Vākyapadīya* 3.7.45 に見られる文法学上の議論があると思われる⁴。すなわち、持金剛位が実践という「行為」の結果であるならば、その行為の目的対象である持金剛は、作り出されるもの (nirvartya)、変容の結果 (vikārya)、到達されるもの (prāpya) のいずれかであると主張する。この論難に対して、Ratnarakṣita は持金剛位は「行為」ではなく「信 śraddhā」を通して得られるものであると言い、そもそも対論者の論難が成り立たないとする。その後、対論者の提示する「持金剛は、作り出されるもの (nirvartya)、変容の結果

³ 当該箇所のサンスクリット語テキストは種村・加納・倉西 2016a: (15)–(16)、和訳は種村・加納・倉西 2016b: 135–136 を参照。

⁴ *Vākyapadīya* 3.7.45 (*Sādhanaśamuddeśa*): nirvartyaṃ ca vikāryaṃ ca prāpyaṃ ceti tridhā matam | tatprepsitatamaṃ karma caturdhānyat tu kalpitam || (E¹ vol. 3, part 1, p. 266) 【小川訳】「それら [一般的に kāraka と呼ばれるもの] のうち、[〈行為主体〉が自己の〈行為〉を通じて] 最も得ようと欲するものが〈目的〉(karman) と呼ばれる。[そしてその〈目的〉は] 〈実現対象〉(nirvartya)、〈変容対象〉(vikārya)、〈到達対象〉(prāpya) と呼ばれる三種に区分されると考えられる。一方、他の [〈目的〉] は四種に区分されると考えられる。」(小川 2007: 24) Cf. *Aṣṭādhyāyī* 1.4.49 kartur īpsitatamaṃ karma.

nirvartya に関しては、対論者が生ずる性質のもの (samudayadharmaka) と見なしているので、*Padminī* の当該議論においては「生み出されるもの」を意味して使用されている考えられる。

果 (vikārya), 到達されるもの (prāpya) のいずれかである」という説を受け入れたとしても、不都合はないという議論を展開する。

以下に示しているのは、校訂テキストの各セクションの概要および Ratnarakṣita の主張が論難のどの箇所に対応しているのかを示したものである。

1. 論難. 対論者による論難の提示：持金剛位とは作り出されるもの (nirvartya), 変容の結果 (vikārya), 到達されるもの (prāpya) のいずれかである。しかし、いずれの場合も以下に述べるような不都合な結論が導き出される。

1.1. 持金剛位が nirvartya である場合の誤謬. 持金剛位が作り出されるものであるならば、それは消滅するか時間・場所が限定されるものである。

1.2. 持金剛位が vikārya である場合の誤謬. 持金剛位が変容の結果であるならば、刹那滅論者には認められない。

1.3. 持金剛位が prāpya である場合の誤謬. 持金剛位が到達されるものであるならば、協働因（方便タントラ）と質量因（因タントラ）は無用になる。（すでに結果が存在しているので。）

1.3.1. 獲得者と獲得対象とに区別がある場合の誤謬. 対象に到達する者と到達される対象が異なるならば、その結果は「仏位を有するもの」と表現されるべきで、「仏位」とはならない。

1.3.2. 獲得者と獲得対象とに区別がない場合の誤謬. 到達される対象が到達者と異ならないのであれば、持金剛位を得るための修行は必要ない。

1.3.3. 能覆と所覆の関係にある場合の誤謬. 持金剛位が構想概念（分別）に覆われているならば、以下のような望ましくない結果がある。

1.3.3.1. 能覆と所覆の関係は同一の心に属する二項間にはありえない. 持金剛位と構想概念という、相反するものどうしが一つの心に共存することになってしまう。

1.3.3.2. 持金剛位は所覆となってもその効果を捨て去ることはない. 持金剛

位が、概念構想に覆われているために確認できなくても、それが効果的作用を捨て去ることはない＝実践者は持金剛になれる。

1.3.3.3. 仏果は所覆とはなりえない。 概念構想は、真に存在するものを見ることを妨げるから、闇をその性質としていると言える。もしそうであるならば、それは、無比の光を性質としている仏性を覆うことはできない。

1.3.3.4. 相反する二属性が単一の本体を持ちえない：心の垢の除去はありえない。 煩悩は心によりその対治が働くときに取り除かれる。もしそうであるならば、煩悩、煩悩の除去、煩悩の対治が一つの不可分の心に共存することは不都合である。

2. 答論

2.1. 対論者の立論自体無意味である：教説内容は論理を超越した信の対象である：論難全体への答論。 論難自体が無意味である。持金剛位は信により獲得されるものであり、論理を超えている。(→ 全体への答論)

2.2. 持金剛位をめぐる論難への個別の回答

2.2.1. 第 1 の論難 (nivartya である場合の誤謬) の排斥。 たとえ持金剛位が作り出されるもの、変容の結果、到達されるもののいずれかであっても以下のように不都合はない。

2.2.1.1. 滅が断絶を意味する場合。 心相続は止むものではない。[消滅することの否定] ブッダの福德と智慧は廣大無垢である。[時間・場所が限定されることの否定] (→1.1)

2.2.1.2. 滅が変化を意味する場合：変化身はありうる。 異なる結果 [=輪廻] の原因はブッダには生じ得ない。しかしながら、これは連続性に関して恒常である変化身には当てはまる。(→1.1)

2.2.1.3. 滅が刹那滅を意味する場合 = vikārya の論難：受用身はありうる。 「滅する」ことの意味が類似の結果が連続して生じることであるなら受用身の場合には認められる。受用身は不断にして恒常であるから。(→1.2)

2.2.2. 持金剛位が prāpya である場合の誤謬への回答：法身はありうる。 法

身である場合、到達される対象となりうる。

2.2.2.1. 獲得対象と獲得者が不可分の場合の誤謬への回答。 「到達」とは「証得」を意味するのであり、手でつかむことではない。(→1.3)

2.2.2.2. 能覆と所覆の関係にある場合の誤謬に対する答論。 持金剛位が構想概念に覆われている場合の誤謬に対する答論(→1.3.3)

2.2.2.2.1. 仏果は覆われていても = 識別されずとも効果を発揮することへの答論。 実践者が持金剛位を自性として有していても、その者が必ずしもそれを確認しているわけではない。それを確認するための適切な実践が必要である。

最高真実においては、到達される対象・到達する者・到達することの間に区別はない。(→1.3.1, 1.3.2)

世俗の真実においては、心の性質を変容させる原因が取り除かれた時に、心の真の性質が獲得される。しがたって、実践者がこれらの原因を取り除く手段を用いることに不都合はない。(→1.3.1, 1.3.2, 1.3.3.2)

2.2.2.2.2. 持金剛位は所覆となってもその効果を捨て去ることはないことへの論駁。 上記の理由により、持金剛位が、概念構想に覆われているために確認できなくても、それが効果的作用を捨て去ることはない＝実践者は持金剛になれる、という見解は否定される。(→1.3.3.2)

2.2.2.2.3. 仏果は所覆にならないことへの論駁。 仏位と概念構想は光と闇という言葉により直接に指示される特定の性質を有するのではない。光と闇はそれぞれ、仏位と概念構想の性質のメタファーである。(→1.3.3.3)

2.2.2.2.4. 相反する二属性が単一の本体を持ちうることの論証。 心の性質の誤った認識は、その真の性質＝刹那滅性を確認しないことにより引き起こされる。まさにこの理由により、心は本性清浄であり、煩惱は外来的なものである。(→1.3.3.4)

2.3. 心はいかなるあり方でも無住处であり、一と他を離れている。(→1.3.3.1)

Ratnarakṣita は必ずしも対論者の論難に対して、その論難の順番通りに一

対一対応で回答を提示している訳ではなく、したがって論難と回答がどのように対応するかについては、まだ再考の余地が残されていることを付記しておく。

対論者の論難と Ratnarakṣita の答論の内容については、近く発表を予定している訳註において詳しく分析する予定である。

写本資料および略号

本論文で使用する *Padminī* の写本資料は種村・加納・倉西 2017 と同様である。

- | | |
|----|---|
| T | Takaoka CA17, complete, paper, 49 fols., NS 732. |
| B | Baroda No.78, complete, paper, 92 fols., VS (?) 1983. |
| N | NAK 5/203 = NGMPP B113/8, complete, paper, 230 pages, NS 1044. |
| Ra | Tucci's Collection 3.7.16; ch1-13, incomplete, paper, 35 fols. |
| Rb | Tucci's Collection 3.7.26; ch18-33, incomplete, paper, 41 fols. |

上記写本の Ra および Rb は余白に註記が記されており、これらすべてを校勘欄に反映するのは煩雑かつ困難であるので、種村・加納・倉西 2016, 2017 同様に本稿では基本的に校訂作業に使用しない。

本論文におけるテキストの critical apparatus およびそこで使用される記号は以下の通りである。テキストの脚註は 3 層に分かれている。(必ずしも各ページに 3 層すべてが現れるわけではない。) 1 番上の層は各写本のフォリオ番号を示している。第 2 層は *Padminī* が引用する文献に関する情報が記載されている。第 3 層には写本の異読情報が記してある。

註記される箇所がある行番号の後に見出し語があり、見出し語に異読などの註記が引き続くことになる。第3層において、見出し語の直後に出てくる記号は、本文中で採用された読みを指示する写本の記号であり、その後セミコロンで区切られて異読が提示される。また、emendation および conjecture を支持する文献があるときは、← の記号で示される。(例: *santi* || em.(← *Hevajratantra*); *sati* TBN)

また、校訂に関する註記は丸括弧付きの番号で示され、テキストの後に記している。これら註記の記載方法は基本的に種村・加納・倉西 2016a, 2017 同様である。

上記写本略号以外の、本論文で使用する略号は以下の通りである。

<i>ac</i>	before correction
conj.	a diagnostic conjecture
corr.	a correction
D	sDe dge edition
em.	an emendation
n.e.	not existent
Ota.	D. SUZUKI (ed.) <i>The Tibetan Tripitaka, Peking Edition: Kept in the Library of the Otani University, Kyoto: Reprinted under the Supervision of the Otani University of Kyoto: Catalogue & Index</i> , Tokyo: Suzuki Research Institute, 1962. 『影印北京版西藏大藏經—大谷大学図書館蔵—大谷大学監修西藏大藏經研究会編輯総目録附索引』東京・鈴木学術財団, 1962.
P	Peking edition
Taisho	大正新脩大藏經
Tib	Tibetan Translation
Toh.	H. UI, M. SUZUKI, Y. KANAKURA and T. TADA (eds.)

A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons,
Sendai: Tohoku Imperial University, 1934. 『西藏大蔵
經総目録東北大学所蔵版』 仙台・東北帝国大学, 1934.

- X 不明の文字あるいは記号.
«...» 筆者により補われた箇所.
□ 写本の空白。記号 1 つで 1 akṣara 分。
^ 写本空白を埋める記号。

TEXT

C. Excurses

1. Pūrvapakṣaḥ

nanu vajradharatvaṃ nirvartyaṃ vikāryaṃ prāpyam vā. kiṃ cātaḥ.

- 5 **1.1. Undesirable consequences in the case that the *vajradharatva* is *nirvartya***
nirvartyaṃ ced vināśi syād pradeśi ca. uktaṃ ca —

yat kiṃcid bhikṣavaḥ samudayadharmakaṃ tat sarvaṃ nirodha-
dharmakam⁽¹⁾

- iti. ataḥ punaḥsaṃsāritvaprasaṅgaḥ. pradeśavartitvena sarvajñataiva na syād
10 ekadeśakāljñāne kāladeśāntarajñānāsambhavāt. tato muktāmuktayor viśeṣā-
bhāvaḥ prasajyate.

- 1.2. Undesirable consequences in the case that the *vajradharatva* is *vikārya***
vikāryapakṣas tu nirvartyapakṣāviśiṣṭa eva. ekasya hi kasyacid avasthā-
tur avasthāntaranivṛtyāvasthāntarapravṛttau suvarṇādeḥ kuṇḍalībhāvādivad
15 vikāravavyavahāraḥ⁽²⁾.

4 nanu || B f.5v2 9 punaḥ° || T f.4r1

7 yat kiṃcid ... nirodhadharmakam || Quoted in Kamalaśīla's *Tattvasaṃgrahapañjikā* ad *Tattvasaṃgraha* v.3 (E^K vol. 1, p. 12, l. 26; E^{Sh} vol. 1, p. 16, ll. 6–7)

4 vajradharatvaṃ || N T; *vajradharatva* N 4 nirvartyaṃ || em.; *nirvandha*°B; *nirvartya* N T^pc(1);
nirvandham T^ac; *nirvartya* T^pc(2) 4 vikāryaṃ || B^pc N T; *vikārya* B^ac 6 ced || B T; *cid*
N 6 syād || em.; *śyāda* B N T 7 kiṃcid || N T; *kicid* B 8 nirodhadharmakam || N T; *viro-*
dhadharmmakam B 9 ataḥ || N T; *ata* B 9 punaḥsaṃsāritvaprasaṅgaḥ || N^pc T; *punaḥsatkāri-*
tvaprasaṅgaḥ B; *punaḥsaṃsāritvaprasaṅgaḥ* N^ac 11 viśeṣābhāvaḥ || N T; *viśeṣābhāva* B
11 prasajyate || N T; *prasajyate* B 13 eva || N T; *bhuva* B 14 avasthātur avasthāntara-
nivṛtyā° || conj. (←Tib.); *avasthāntaravasthāntaranivṛtyā*° N T (There is an *akṣara nta* in the mar-
gin (above the first *nta*) of MS T.); *avasthāntara*⊂*vasthāntara*° B 14 °vasthāntarapravṛttau || N
T; °vastāntarapravṛttau B

sa ca kṣaṇabhaṅgavādinām buddhānām mate 'saṃbhavī, atyantasaḍṛśānām
api pratikṣaṇam niranvayalayodayasvabhāvatvāt.

1.3. Undesirable consequences in the case that the *vajradharatva* is *prāpya*
prāpyatve tu bhūyāṃso doṣāḥ.⁽³⁾ na hi prāpyasya phalasya saḥakāryupādāno-
20 payogaḥ.

1.3.1. In the case that there is a distinction between *prāpaka* and *prāpya*
kiṃ ca prāptir nāmālabdhasya lābhaḥ. sa ca bhedenairopapadyate, saṃyo-
gaviyogayor bhedaikaniṣṭhatvāt. tathā ca sati buddhatvavān iti syāt, yathā
gomān. na tu buddha iti.

1.3.2. In the case that there is no distinction between *prāpaka* and *prāpya*
25 abhede tu prāptam eva, na prāpyam. yad dhi yadabhinnaṃ tat tasya sva-
bhāvabhūtam, yathā vahner dāhakatvam. ato vinaiva mārgābhyāsaṃ sarva
eva sattvā buddhā bhavyeḥ. na hi yo yasya svabhāvaḥ sa taṃ sāksātkartum
upāyaprayogam ārabhet.

22 In MS N, p. 10 starts with (sva)bhāvabhūtaṃ yathā vahner dāhatvaṃ which is mistakenly written
after nāmālabdhasya. 27 °bhūtam || B f.6r

16 kṣaṇabhaṅgavādinām || There is a *kākapada* between *akṣaras vā* and *dī*.

16 sa ca || N T; sa va B 16 kṣaṇabhaṅgavādinām || N T; kṣaṇabhaṅgī^vādinām B
16 buddhānām || em.; *buddhānām* T 16 °saḍṛśānām || B; °saḍṛśyānām 17 pratikṣaṇam || N
T; pratikṣaṇa B 17 niranvayalayodaya° || N; niranvayatvayodaya B T 19 prāpyatve tu
bhūyāṃso || em. (←Tib.); prāpyatvetunsa N T; prāpyatvettunso B 19 phalasya || N T; n.e.
B 20 saḥakāryupādānopayogaḥ || N T; saḥakāryapādānopayogaḥ B 22 nāmālabdhasya || T^{pc};
nāmālabdhasyāsvabhāvabhūtaṃ yathā vahner dāhatva B *nāmālabdhasya svabhāvabhūtaṃ yathā*
vahner dāhatvaṃ N T^{ac}. Probably this is a dittographical error caused by eyeskip from *sya* of
nāmālabdhasya to *sya* of *tat tasya* in the next paragraph. 23 saṃyogaviyogayor || N T; saṃyo-
gaviyogayo B 23 bhedaikaniṣṭhatvāt || N T; *bhedaivaniṣṭhatvāt* B 23 tathā ca sati || N T;
tathā sati B 24 buddha || em.; *buddhatva* B N T 26 yadabhinnaṃ || N T; *padabhinnaṃ* B
27 mārgābhyāsaṃ || N T; *mārgāsyātsaṃ* B 28 sāksātkartum || N; *sāksātakartum* T

30 1.3.3. Undesirable consequences in the case that the *vajradharatva* is covered with *vikalpa*

1.3.3.1. The *vajradharatva* and *vikalpa* cannot become what covers and what is covered in single mind

svabhāvabhūtaṃ apy anādivitathavikalpatimirāvṛtatvāt pṛthag ivāprakāśamāna-
 35 rūpaṃ ca saṃvṛttam, «yathā» nabhaḥ prakāśavan meghādyāvṛtam⁽⁴⁾ iti cet, na.
 ubhayor api cittadharmaṭayaikāśrayatvenāvāryāvāraṭatayor ayogāt. na khalu
 maṇigatayor bhāsvaratvakāṭhinyayor āvāryāvāraṭatā nāma. bhinnadharmidhar-
 mayor eva virodhinor etad upaṇnam.

1.3.3.2. The *vajradharatva* has its *arthakriyā* even if it is covered with *vikalpa*

40 kiṃ cāvṛtatvaṃ nāma buddhatvasyāniścīyamānarūpatvam. na ca yad ya-
 trāniścīyamānatayā sthitaṃ tat tatra svām arthakriyāṃ pariharati. na khalu na
 niścito dahana iti na dāhakatvam. maṇimantrauśadhāny api yāvad bālakādy-
 aṅgasthitāni tenājñāyamānāni svām arthakriyāṃ kurvanti.

1.3.3.3. The *vajradharatva* cannot be covered with *vikalpa*

34 °timirā° ॥ em.; °mitilā° B N T (metathesis) 35 pṛthag ivāprakāśamānarūpaṃ ca
 saṃvṛttam ॥ em.; pṛthag ivāprakāśamānarūpaṃ ca saṃvṛttam B; pṛthag ivāprakāśamānarūpaṃ
 ca saṃvṛttam N T 35 nabhaḥ prakāśavan ॥ N T; nabhaḥ prakāśan B 35 na ॥ N
 T; n.e. B 36 cittadharmaṭayaikāśrayatvenāvāryāvāraṭatayor ayogāt ॥ em.; cittadhar-
 mmatayaikāśrayatvainācāryyācāraṭatayogāt B; cittadharmaṭayaikāśrayatvainācāryyāvāraṭatayo-
 gāt N T 37 maṇigatayor ॥ N T; maṇiṣatayor B 37 āvāryāvāraṭatā ॥ conj.; ācāryyācāryyāṭatā
 B; ācāryyācāryyāṭatā N; āvāryāvāryeṭatā T^{ac}; āvāryāvāryeṭatā T^{pc} 37 nāma ॥ em.; nāmā B N
 T (Probably a corruption of nāma + a single daṇḍa) 38 etad ॥ B T; atad N 38 upaṇnam ॥ N
 T; upaṇnam B 40 cāvṛtatvaṃ ॥ em.; cāvṛttatvaṃ B N T 41 yatrāniścīyamānatayā ॥ em.; ya-
 trāniścīyamānatayā B; yatrāniścīyamānatayā N T^{pc} (The akṣara ści is marked in N); yatrāniś-
 cīyamānatayā T^{ac} 41 sthitaṃ ॥ B N; sthita T 41 tat tatra ॥ N T; tatratra B 41 khalu ॥ em.;
 khalva B N T 42 dāhakatvam ॥ em.; dāhakar B; dāhaka N T 43 kurvanti ॥ N T; kurvati B

45 api ca vikalpānām bhūtārthadarśanavibandhakatvena tamorūpatvāt syād
 āvāraṅkatvam. buddhatvasya tu paramāpratisamālokarūpatvāt katham āvārya-
 tvam. na hy ālokasyāndhakāreṇāvāraṇam. pratighātako hy āloko 'ndhakārasya.
 yadi caivaṃ syān na kadāpy āvaraṇaprahāṇyā bhavitavyam.

**1.3.3.4. Two attributes contradictory to each other cannot belong to a single
 50 entity — it is impossible to remove impurity from the mind**

kiṃ ca malaprahāṇir bhavanī cittena vyāpāryamāṇe pratipakṣe bhavet, katham
 caitat trayam ekasminn akhaṇḍarūpavastuny ekakālam upapadyate. ātmani
 kriyāvirodhāt. bhinnakālatve tu sutarām asaṅgatiḥ, ekakāle 'nyāsaṃbhavād iti.

2. Uttaraṇpakṣaḥ

**2.1. The opponent's objections are meaningless — the vajradharatva is at-
 55 tained only through the faith**

tad etat sarvam asāram, tarkāgamyatvād uktārthasya. uktaṃ ca sūtrālamkāre —

niśrito 'niyato 'vyāpī sāmṃvṛtaḥ khedavān api |
 bālāśrayo matas tarkas tasyāto viṣayo na tat ||

46 °sya tu || N 11 52 °papadyate || B f.6v

58 niśrito ... tat || *Mahāyānasūtrālamkāra* 1.12

45 °vibandhakatvena || N T; °vivandhavandhakatvena B 45 syād || em. *syād apy* B N
 T 46 āvāraṅkatvam || N T; *ācārakatva* B 46 buddhatvasya || B N^{pc} T; *buddhasyasya* N^{ac}
 46 katham || N T; *kathan* B 47 āvāryatvam || em.; *ācaryatvaṃ* B; *ācaryatvaṃ* N; *āvarya-*
tvam T 47 ālokasyāndhakāreṇāvāraṇam || *ālokasyāndhakāreṇācaraṇam* B; N^{pc} T; *ālokasyā-*
ndhakāreṇāndhakāreṇāvāraṇam N^{ac} 47 'ndhakārasya || N T; *ndharasya* B 48 syān || N T;
 syā B 52 akhaṇḍarūpavastuny || em. *akhaṇḍarūpe vastuny* B N T 53 kriyāvirodhāt || N T;
kriyāvirodhāto B 53 bhinnakālatve || N T; *bhinnakāletve* B 53 asaṅgatiḥ || em. (← Tib.); *asa-*
ṅgar B N T (In N, there is a correction mark on the *aṅsara re*. The marginal note is, however, un-
 clear.) 57 tarkāgamyatvād || N T; *tarkkāgamyatvā* B 57 uktārthasya || N T^{pc}; *uktārthasyā* B;
urktārthasya T^{ac} 58 khedavān || N T; *khadavān* B 59 bālāśrayo || N T; *vālāśrayī* B

60 iti. ata evoktaṃ śrīherukābhidhāne —

sāmānyaṃ sarvatantrāṇāṃ na hantavyāni hetubhiḥ |
śraddhāmātreṇa gr̥hyante na kareṇa na cakṣuṣā ||⁽⁵⁾

iti. mahāyānottaratantre 'pi —

śraddhayaivānugantavyaṃ paramārthe svayaṃbhuvām |
65 na hy acakṣuḥ prabhādīptam īkṣate sūryamaṇḍalam ||⁽⁶⁾

iti. sarahapādair api —

buddher agocaratayā na girāṃ pracāro
dūre guruprathitavastukathāvatāraḥ |
tat tu krameṇa karuṇādiguṇāvadāte
70 śraddhāvatāṃ hṛdi padaṃ svayam ādadhāti ||⁽⁷⁾

iti.

tarhi vedādipravṛttir apy avirudhaiva. na. tasya laukikapramāṇenāpi bādhi-
tatvāt. iha tu tad asaṃbhavi⁽⁸⁾ gurupāraṃparyāgatāmnāyenānubhavagamyatvaṃ

62 na hantavyāni || T f.4v 72 °pi bādhitatvāt || N 12

61 sāmānyaṃ ... cakṣuṣā || *Laghuśaṃvaratantra* 26.12cd–13ab = *Abhidhānottara* 43.7cd–8ab
(MS I f. 139r) 64 śraddhayaivānugantavyaṃ ... sūryamaṇḍalam || *Ratnagotravibhāga* 1.153

67 Saraha's *Svādhiṣṭhānakrama* v.11 (P f. 139v1–2, D f. 125v7).

60 śrīherukābhidhāne || N T; *śrīherukābhine* B 61 sāmānyaṃ || N T; *sāmānya* B
62 kareṇa || em.; *karāṇe* B N T 63 mahāyānottaratantre || B T; *mahāyāne liaratanantre* N
64 śraddhayaivānugantavyaṃ || em. (← *Ratnagotravibhāga*); *śraddhayaivātra gantavyaṃ* B
N T 64 svayaṃbhuvām || N T; *svayaṃbhuvā* B 66 sarahapādair || em.; *saharapādair* B N
T 67 pracāro || N T; *pracūro* B 72 avirudhaiva. na tasya || T; *aniruddhaivā na tasya* B;
viruddhaivān tasya N 72 laukikapramāṇenāpi || N T; *lokapramāṇenāpi* B 73 tad || N T; *vad*
B 73 asaṃbhavi || em.; *asaṃbhavo* B N T 73 °nubhava° || N^{Pc} T; °bhava° B °nubha[X]va°
N^{ac}

ceti kva sāmīyam. śraddhāpy atrāstitvagūṇavattvaśakyatvaiḥ pramāṇapratītaiḥ
 75 sampratyayaprasādābhilāśākārā. na punar jaḍānām iva nirmuktikā.

2.2. Answers to each objection

2.2.1. There is no undesirable consequence even if the *vajradharatva* is *nirvartya* or *vikārya*

kiṃ cābhyupagamyāpy ucyate. yat tāvad uktaṃ nirvartyatve vināśitvaṃ tatra ko
 80 'yaṃ vināśaḥ, pradīpāder iva samṭatyuparatimātraṃ vā bījāder ivāṅkurādīpra-
 bandhāntarotpattiyā pūrvaprabandhanivṛttir vā pratikṣaṇaṃ sadṛśāparāparakā-
 ryotpādo vā.

2.2.1.1. In the case that *vināśa* means *saṃtatyuparati* (→1.1)

na tāvad ādyaḥ, cittasamṭater eva sarvathocchityasambhavāt. dīpāder api
 85 nirupahatapradeśe tailavartyādisambhave ciratarāvasthānaṃ siddham. kiṃ
 punar ākāśavipulāmalapuṇyajñānasambhāravato bhagavataḥ. loke 'pi yāvad
 avaratarapuṇyamātrakaṃ tāvat sattvānām prabandhānucchedo dṛśyate.⁽⁹⁾

ata eva na pradeśavṛttitvadoṣaḥ sambhāradvayasya vyāpītvāt.

2.2.1.2. *Vināśa* could mean change in the case of the *nirmāṇakāya* (→1.1)

84 °va sarvathocchityasambhavāt || B f.7r

74 sāmīyam || N T; sāmīyam B 74 °gūṇavattvaśakyatvaiḥ || em.; °gūṇavatte kīyatvaiḥ B; °gūṇa-
 vatte śakyatvaiḥ N T 74 pramāṇapratītaiḥ || N T; pramāṇapragṛītaiḥ B 75 sampratyaya° ||
 T^{pc}; sampratyaya° B N; sampraya° T^{ac} 75 °prasādābhilāśākārā || B T; °prasādābhilāśākārā N
 75 jaḍānām || em.; jahānām B N; jabhānām T 79 cābhyupagamyāpy || N T; cātyupagamāpy
 B 79 yat || N T; ya B 79 nirvartyatve || N T; nirvartyatve B 80 ko 'yaṃ || N; kāryaṃ T
 80 samṭatyuparatimātraṃ || N T; samṭatyuparatimātraṃ B 81 °nivṛttir || em.; °nirvṛttir B N T
 84 tāvad ādyaḥ || em.; tāvadāvadādyah B N T 84 eva || em.; iva B N T 86 ākāśa° || T; ākāśam
 B; ākāṣa° N 87 avaratarapuṇyamātrakaṃ || T; acaratarapuṇyamātrakaṃ B; acaratarapuṇyamā-
 trakaṃ N 87 dṛśyate || N T; dṛśye B 88 pradeśavṛttitvadoṣaḥ || N T; pradeśavṛddhitvadoṣa B
 88 sambhāradvayasya || N T; sambhāracchapa B

90 dviṭīyo 'pi pakṣo bhagavaty asaṃbhavī, visadṛśakāryotpattihetvasaṃbhavāt. samkleśadvayaṃ hi tatkāraṇam, tac ca bhagavataḥ prahīṇam. kiṃ ca sāpy aniṣyamāṇā pratyayabalād āpatantī nābhimatā. na tu svecchādhīnāpi, tasyā nirmāṇakāye prabandhanitye saṃbhavāt⁽¹⁰⁾.

2.2.1.3. *Vināśa* could mean momentariness in the case of the *saṃbhogakāya*

95 (→1.2)

tṛtīyas tu nāniṣṭo, 'sraṃsananityasya saṃbhogakāyasyeṣṭatvāt. tasmāt saṃbhoganirmāṇakāyāpekṣayā nirvartyatvam apīṣṭam.

2.2.2. The *vajradharatva* is *prāpya* in the case of the *dharmakāya*

dharmakāyāpekṣayā tu prāpyatvam eva. na ca yathoktāvakāśaḥ.

100 2.2.2.1. *Prāpya* means *adhigama* (→1.3)

tathā hi yat tāvad uktam abhede prāptir virudhyata iti. tatra prāptir adhigamaḥ, na tu karagrahaṇam. sa cābhede 'py aduṣṭaḥ.

2.2.2.2. Answer to the objection that there are undesirable consequences in the case that the *vajradharatva* is covered with *vikalpa* (→1.3.3)

105 2.2.2.2.1. Practitioners needs appropriate practices to ascertain the *vajradharatva* as his nature (→1.3.1, 1.3.2, 1.3.3.2)

92 °syā nirmāṇakāye || N 13

90 asaṃbhavī || N T; āsaṃbhavī B 91 tatkāraṇam || em.; takāraṇam B N T 91 tac || N T; taś B 91 bhagavataḥ || N T; bhagavatā B 91 kiṃ ca || N T; kin na B 92 aniṣyamāṇā || N T; aniṣyanamāṇā B 92 āpatantī || em.; apittattī B; āpitantī N T 92 nābhimatā || N T; śabhimatā B 92 svecchādhīnāpi || N; svecchādhīnāpā T svecchādhīnāpi B 93 nirmāṇakāye || T; nirmāṇakāya N 93 prabandhanitye saṃbhavāt || B N; prabandhanitye 'saṃbhavāt T 96 nāniṣṭo || T; nāniṣṭo N 96 'sraṃsananityasya || em.; 'sraṃsanānityasya B N; 'sraṃsanānityasya T 97 °nirmāṇakāyā° || N^{pc}; °nirmākāyā° N^{ac} T 97 apīṣṭam || N T; amīṣṭam B 99 yathoktāvakāśaḥ || N T; yothoktāvakāśa B 101 abhede || em.; abhedyam B N T 101 prāptir adhigamaḥ || em.; prāptinacavigamo B; prāpti[va]vigamo N^{ac}; prāpti[va]vidhigamo N^{pc}; prāptivavigamo T^{ac} prāptivadhigamo T^{pc} 102 aduṣṭaḥ || N T; aduṣṭa B

na ca yad yatra sthitam svarūpabhūtam api tad avaśyaṃ niścīyate. yathā kṣaṇa-
bhaṅgītādi na niścitam yāvan niścayānucita evācāraḥ.

kiṃ caitat paramārthasatyāpekṣayocyate samvṛtisatyāpekṣayā vā. prathame
110 na kiṃcid aniṣṭam. na hi paramārthe prāpyaprāpakapṛāptayaḥ. sarvadharmānu-
palambho hi paramārthaḥ.

dvitīye tu pratyakṣavirodhaḥ. dr̥śyate hi kuto 'pi cittavikārād anyathā sthi-
tam api svarūpam anyathā. yathā cittam pittaprapokpād dhuttūrādibhakṣaṇād
vābhramad api svaśarīraṃ vibhramad eva. yathā ca tasya svabhāvasthitasyāpi
115 svaśarīrāder alīkabhrmahetuvināśāt prāptir ucyate. tatprāptaye copāyaprayogas
tathaiveti kim anupapannam.

2.2.2.2. Refutation to the objection that the *vajradharatva* has its *arthakriyā* even if it is covered with *vikalpa* (→ 1.3.3.2)

112 dvitīye || B f.7v 114 °bhāvasthitasyāpi || T f.5r

107 yatra sthitam || N T; *yatra sthitam* B 108 kṣaṇabhaṅgītādi na niścitam || conj.; *kṣaṇa-
bhaṅgādiniścite* B; *kṣaṇabhaṅgigādiniścite* N; *kṣaṇabhaṅgītādiniścite* T 108 niścayānucita || B
N; *niścayānucita* T 108 evācāraḥ || N T; *evācāra* B 109 caitat || em.; *caivatat* B;
cairatratat N (There are dots under the *akṣaras ratatra*.); *caibhrat* T^{ac}; *caiva tat* T^{pc}
109 paramārthasatyāpekṣayocyate || B N^{pc} T; *paramārtha* N 109 samvṛtisatyāpekṣayā || B;
satyāpekṣayo N^{ac}; *samvṛtisatyāpekṣayā* N^{pc} T 110 °prāptayaḥ || em.; °*prāptiya* B; °*prāptiyaḥ*
N T 111 paramārthaḥ || N T; *paramārtha* B 112 dvitīye || N T; *dvitīya* B 112 pratyakṣavi-
rodhaḥ || em.; *pratyakṣavirodha* B; *pratyakṣaḥ virodha* N; *pratyakṣaḥ virodho* T 112 dr̥śyate || N
T; i□te B 112 kuto || T; *kṛto* B N (There are dots under the *akṣara kṛ*.) 112 cittavikārād || N;
cittavikārād T B 113 cittam || em.; *cinta* B; *citte* N; *citta* T 113 pittaprapokpād || T^{pc}; *prapokā*
B; *pituḥ prapokād* N; *prapokād* T^{ac} 113 dhuttūrādibhakṣaṇād || T; □ttarādibhakṣaṇād B; *dhū-
ttūrādibhakṣaṇād* N 114 vābhramad || N T; *vā□mad* B 114 svaśarīraṃ vibhramad || em.;
svaśarīravibhramad T; *tvaśarīravibhramad* B N 114 svabhāvasthitasyāpi || N T; *svabhāvasthi-
tasyāpi* B 115 °vināśāt || em.; *vināśā* B N T 115 copāyaprayogas || B T; *copadrayogas* N
116 tathaiveti || B; *tatheveti* N T 116 anupapannam || N T; *upapannam* B

etenaivāniścīyamānatayāpi sato 'rthakriyāntakāritvaṃ pratyākhyātam. na hy
 120 ayam sārvaṭrīko nyāyaḥ.

2.2.2.2.3. Refutation to the objection that the *vajradharatva* cannot be covered with *vikalpa* (→ 1.3.3.3)

yad apy ālokasya katham andhakāreṇāvaraṇam ityādy uktam tad api
 na kiṃ cit. na hi buddhatvavikalpāḥ ālokatamaḥśabdavācyarūpaviśeṣau.
 125 vipakṣavyāvartanasāmarthyena tair avyāvartatyena sarvajñeyāvabodha-
 hetutvena cālokarūpatvam uktam. vikalpānāṃ ca satataṃ vitathārthā-
 bhiniveśitvena tamorūpatvam.

2.2.2.2.4. Demonstration of the fact that two attributes contradictory to each other belong to a single entity (→ 1.3.3.4)

130 viruddhayaḥ katham ekadharmitvam ity uktam iti cet kiṃ hi dṛṣṭe 'nupa-
 pannam. na hi nityagrahāder vipakṣasya kṣaṇikatvādeś ca pratipakṣasyāneka-
 dharmitvam. cittasya hi kṣaṇikatvaṃ svarūpam anavadhārya, viparyayagrahaś

123 lokasya || N 14

119 etenaivāniścīyamānatayāpi || em.; *etainaivāniścīyamānatayāpi* B; *etenaivāniścīyamānatayāpi* N; *etainaivāniścīyamānatayāpi* T 119 'rthakriyāntakāritvaṃ || em.; *rthakriyādikartva* B; 'rthaḥ | kriyāntaditvaṃ N^{ac}; 'rthaḥ | kriyāditvaṃ T^{ac}; 'rthaḥ | kriyāntakaditvaṃ N^{pc} T^{pc} 120 nyāyaḥ || N T; *nyapyatha* B 123 yad apy ālokasya || N T; *yad apy āt-lokasya* B 124 cit || em.; *citā* B; *catā* N T 124 na || em.; *nī* B N T 124 buddhatva° || em.; *buddhatvaṃ* B; *buddhatvaṃ* | N T 124 °vikalpāḥ āloka° || N T; °*vikalpā-āloka*° B 124 °śabdavācyarūpaviśeṣau || em.; °*śavdavāpyarūpaviśeṣā* B; °*śavācyarūpaviśeṣāḥ* N^{ac}; °*śavdavācyarūpaviśeṣāḥ* N^{pc} T 125 vipakṣa° || em.; *vipakṣe* B N T 125 °sāmarthyena || em.; n.e. B; °*sāmarthena sāmarthena* N^{ac}; °*sāmarthena* N^{pc} T 126 sarvajñeyāvabodhahetutvena || em.; *sarvajñayāvavodhahetutvena* B N T 126 cālokarūpatvam || N T; *cālokarūpam* B 126 satataṃ || em.; *sata* B N T 127 vitathārthābhiniveśitvena || N T; *vitathārthā[ll]iveśitvena* B 130 viruddhayaḥ || N T; *viruddha* B 130 ekadharmitvam || N T; *ekadharmitvam* B 131 'nupapannam || N T; *nupapanna* B 131 na || em.; *vi* B; *nī* N T 131 vipakṣasya || N T; *vipakṣasya* B 131 kṣaṇikatvādeś || em.; *kṣaṇikatvādeśaś* B N^{pc}; *ṇikatvādeśaś* N^{ac}; *kṣaṇikatvādeśaś* T 132 viparyayagrahaś || em.; *viparyayagrahaś* B N T (a haplographical error)

ca tasyaiva. ata eva svabhāvasuddhaṃ cittam. malās tv āgantukā ity uktam.

2.3. Conclusion: the mind is either one or many in the mundane truth and neither one nor many in the supreme truth (→ 1.3.3.1)

135

cittam ekakhaṇḍam iti tatra kena vipralabdho 'si. samvṛtyā hy avicāra-
manoharam ekam anekaṃ ca cittam. bahavaś ca taddharmāḥ. paramārthe
tu naikaṃ nānekaṃ ca. ata eva maṇḍalacakrādyanekākāraspharaṇaṃ pañca
jñānāni trayaḥ kāyā balavaiśāradyādayaś ca dharmā na bhinnāḥ. para-
140 vsparayatirekāsiddher ekajñānānugamād ekayogaḥśemāc ca. nāpy abhi-
nnā, lakṣaṇabhedān nānārthakriyākaraṇāc ca. pāramārthikaṃ hi vastūpa-
gacchato bhedābhedādikṣapātino doṣāḥ prasajyante. na tu svapnādivat
sarvākārāpratiṣṭhitam.

ity alam atiprasaṅgena.

139 °śāradyādayaś || B f.8r 142 °t sarvākārāpratiṣṭhitam || N 15

133 tasyaiva || N T; tasyaivo B 133 svabhāvasuddhaṃ || N T; svabhāva-śuddha B
133 malās || B T^{pc}; manās N T^{ac} (There are dots under the *akṣara nā* in N.) 133 āgantukā || N T;
āgatukā B 136 ekakhaṇḍam || N T; ekaṃ khaṇḍam B 136 iti || T; i B N 136 tatra || em.; tanu
B; taṃtu N; tatra T 136 samvṛtyā hy || T; savṛtyā hy B; samvṛtyā jy N 137 avicāramanoharam
ekam || N T^{pc}; avicāramastāharam ekam B; avicāramaṇoharam T^{ac}; 138 naikaṃ nānekaṃ || N
T; naikānemekaṃ B 138 °anekākāra° || N T; °anekā° B 140 parasparavyatirekāsiddher || em.;
sparasparavyamitinekāsiddher B; sparasparavyamitirekāsiddher N T 140 ekayogaḥśemāc ||
T^{ac}; ekayogaḥśamāc B; ekayogaḥśenāc N T^{pc} (There are dots under the *akṣara nā* in
N.) 141 lakṣaṇabhedān || T; lvaḥṣaṇabhedān B N 141 nānārthakriyākaraṇāc || em.;
nārthakriyākaraṇāc B N T 142 vastūpagacchato || T; vastupagacchato B; vanbhūyagacchato N
142 prasajyante || em.; prasaḥyanti B N T 144 atiprasaṅgena || em.; iti prasaṅgena B N T

Notes

(1) 当該偈頌は Kamalaśīla 著 *Tattvasaṃgrahapañjikā* (ad *Tattvasaṃgraha* v.3) に引用されている。tathā hi sādhyārthāvinābhūtaṃ līgaṃ viniścitaṃ sad anumānajñānasya kāraṇam, tac ca “yat kiñcid bhikṣavaḥ samudaya-dharmakam *sarvaṃ taṃ (following WANANABE; sarvatra E^B E^V) nirodha-dharmakam” ity evaṃ sādhyena hetor vyāptim upadarśayatā sphuṭataram eva prakāśitam (E^K vol. 1, p. 12, ll. 25–27; E^{Sh} vol. 1, p. 16, ll. 5–8). 渡辺照宏は「yaṃ kiñci samudaya-dhammaṃ sabbaṃ taṃ nirodha-dhammaṃ はパーリ文の常套句である。したがってここでも刊本 sarvatra を sarvaṃ tan と改める。なおこの一句は Prajñākaragupta の *Pramāṇavārttikabhāṣya* p. 166, 15 にも引用されている」と指摘している (1982: 72 註 (23))。

Pramāṇavārttika 2.284cd–286ab and *Pramāṇavārttikālaṃkāra* ad loc. (following the editor’s numeration): tata eva bhagavato ’nenaiva guṇena stutiḥ. pramāṇabhūtatvalakṣaṇena. tad āha —

upadeśatathābhāvastutis tadupadeśataḥ || 284 ||

pramāṇatattvasidhyartham anumāne ’py avāraṇāt |

prayogadarśanād vāsya **yat kiñcid udayātmakam** || 285 ||

nirodhadharmakam sarvaṃ tad ityādāv anekadhā |

kasmād upadeśasya tathābhāvaprāmāṇyalakṣaṇāstutiḥ. tadupadeśataḥ pramāṇatattvasiddhir yathā syād iti. tatra pratyakṣaṃ bhagavataivopadiṣṭam. nīlajñānasamaṅgī pudgalo nīlaṃ jñāti. no tu nīlam eveti. anumānam api na vāritam. ato ’numānam eva nivāritaṃ tu śābdādikam. śanyāḥ sarva-parapravādā aham evaikas tattvavādīti. atha vā prayogasya parārthānumānalakṣaṇasya darśanam asti. yad āha. **yat kiñcid udayātmakam niro-**

dhadharmakam tat sarvaṃ iti (E^S p. 166, ll. 1–10).

より正確に言うと、Dharmakīrti が *Pramāṇavārttika* の中で当該偈頌を引用し(但し、韻律に合うように *samudayadharmakam* を *udayātmakam* と言い換えている)、それを *Prajñākaragupta* が *pratīka* の形で引用していると見て良いであろう。一方 *Prajñākaragupta* 自身は *sarvaṃ* と *tad* の順序を入れ替えているが、これは *Prajñākaragupta* の手にした *Pramāṇavārttika* の読みがそのようになっていたわけではなく、言い回しを変えた結果であると考えられる。

- (2) *avasthātur* はチベット語訳にもとづき補われている。'ga' zhig gis **gnas skabs can** gcig nyid kyi gnas skabs gzhan bzlog nas gnas skabs gzhan rab tu 'jug pa la gser la sogs pa'i rna rgyan gyi dngos po la sogs pa ltar rnam par 'gyur ba'i tha snyad do || (P f. 7v1–2, D f. 5v6–7) また、*avasthātur* がなければ *kasyacit* が何を意味するかが不明瞭である。更に、この部分は直前のセクションの *ekadeśakārajñāne kāladeśāntarajñānāsambhavāt* と類似した表現であることも、この conjecture を支持する一つの理由となり得よう。
- (3) *apparatus* に示してあるように、*prāpyatve tu bhūyāṃso* はチベット語訳にもとづく emendation である。thob bya nyid la ni nyes pa mang ste (P f. 7v3, D f. 6r1)。
- (4) «yathā» *nabhaḥ prakāśavan meghādyāvṛtam* || この反論者の想定反論の箇所は少々問題を含んでいる。まず最初の問題は、*saṃvṛttam* の直前にある *ca* が何と何を結びつける役割を果たしているかである。想定反論では、1. 持金剛位は自性としてあるものである。2. しかしながら、眼翳であるところの概念構想により覆われている。とある。概念構想が眼翳という喩えられていることから、それにより物事を正しく認識することができない、あるいはまったく認識することができないということになる。つまり、自性である持金剛位を異なったものとして認識する、あるいはそのようなものがあることさえも認識できないということになる

う、そのように考えてみた場合、今問題になっている *ca* は、*prthag iva* と *aprakāśamānarūpam* を結びつけ、かつそれは *vā* に近い意味合いを持っていると考えられる。すなわち、概念構想に覆われているため、自性である持金剛位がそれとは異なったもののよう実践者には顕現している、あるいはその姿が顕現していないということである。

あるいは下に示すチベット語訳が示すように、*prthag iva prakāśamānarūpam* (異なったもののよう姿が顕現する) という読みも想定可能である。その場合引き続く *ca* の役割が不明瞭になる。

次に問題となるのが、*nabhaḥprakāśavan meghādyāvṛtam* の箇所である。ここは概念構想に覆われる持金剛位が雲などに覆われる虚空に喩えられている。「雲など」と「など *ādi*」があるのは、覆うものによって、本来輝くことを自性とする虚空がまったく見えなかったり、部分的に見えたりするからであると考えられる。したがってこの箇所は「[本来は] 輝きを有する虚空が雲などに覆われたごとくに」と解釈すべき箇所である。

この解釈が妥当であるならば、我々がテキスト本文で提示した *«yathā» nabhaḥ prakāśavan meghādyāvṛtam* という読みが適切であると考えられる。この場合書写の過程で *yathā* が脱落したわけであるが、その要因としては *prakāśavat* の *-vat* が「～のごとくに」という意味で解釈され、それが脱落の引き金になった可能性が考えられる。もし、*vat* が「～のごとくに」という意味であるならば、*meghādyāvṛtanabhaprakāśavat* という読みが良いと思われる。あるいは、Ratnarakṣita が、*nabhaḥprakāśavan meghādyāvṛtam* という写本 N T の支持する読みで「雲等で覆われた虚空の輝きのごとくに」という意味を示していたのか、あるいはもともと *nabhaḥprakāśavat* という読みだったものに、*meghādyāvṛtam* が後から挿入されたという可能性も考えられる。

当該箇所のチベット語訳は以下の通りである。gel te rang bzhin du gyur kyang kun rdzob tu thog ma med pa'i rnam par rtog pa yang dag pa ma yin pa'i rab rib kyis bsgribs pa'i phyir | rab tu gsal ba dang ldan pa'i rang bzhin

dang tha dad pa lta bur 'gyur *ro (D; *te* P) | nam mkha'i rab tu gsal ba la
sogs pa yang sprin la sogs pas bsgribs pa bzhin no zhe na (P f. 7v7–8, D f.
6r3–4). 【和訳】「もし、[持金剛位が] 自性であっても、世俗において無
始なる、虚偽である概念構想という眼翳により覆われているため、顕現
を有するという自性と異なるかのごとくになる。虚空の顕現などもま
た、雲などにより覆われるごとくであるというならば」。チベット語訳は
saṃvṛttam を saṃvṛtam と理解しており、また aprakāśamānarūpam では
なく prakāśamānarūpam と読み、それを「顕現を有するという自性」と
理解しているようである。

- (5) *app ratus* に示してあるように、当該偈頌の典拠は *Laghuśaṃvaratantra*
である。

Laghuśaṃvaratantra 26.12cd–13ab (E^P):

sāmānyam sarvatantrāṇām na hantavyā nirhetubhiḥ |

śraddhāmātreṇa grhyante na kareṇa na cakṣuṣā ||

(E^G p. 153, E^P vol. 2, p. 486)

イタリック体で表されているところが、*Ratnarakṣita* の引用する読みと
異なる箇所である。実践の果としての持金剛位は論理で理解されるべき
ものでなく、信により体得されるものであるというのが *Ratnarakṣita* の
答論の論旨であり、その点から考えれば *Ratnarakṣita* の引用する読みは
その文脈に適する。また、韻律の面からも *Ratnarakṣita* の引用する読み
が良い。但し、どちらの読みであっても *sāmānyam* と性あるいは数が一
致しない。

註釈者の *Jayabhadra* は当該箇所を *hantavyā hetubhiḥ* と読んでいるよ
うである。（ただし、この場合第 2 パーダが *hypometrical* になる。）

Cakrasaṃvarapañjikā ad *Laghuśaṃvaratantra* 26.12cd–13ab:

sāmānyam sarvatantrāṇām ity etad rahasyam sarvatantrāṇām

iti sāmānyam. ata eva rahasyam abhisamdhānam anyatantravido
na vidanti. ato **na hantavyā hetubhir** ity uktam. hetubhiḥ
pratyakṣādibhiḥ pramāṇair na hantavyam adūṣyam ity arthaḥ.
kiṃ punaḥ kartavyam ity āha **śraddhāmātreṇa grhyata** iti. **na**
kareṇetyādīnā tam evārthaṃ sūcayati. (杉木 SUGIKI 2001: 126)

* 太字の部分が pratīka.

【和訳】「すべてのタントラに共通するもの」というこのことが、すべてのタントラにとって秘密であるので「共通するもの」である。まさにこのゆえに、他のタントラを知る者たちは秘密であるという意図を理解しないのである。それゆえに「理由(理屈)により捨て去られるべきではない」と述べられている。理由(理屈)により、すなわち直接知覚などのプラマーナにより捨て去られるべきではない、すなわち非難されるべきではないという意味である。それでは何となされるべきか？[という疑問に答えて、世尊は]「信のみにより把握されるべきである」[と説いたのである]。「手により[把握されるべきでは]ない」などという箇所により、その同じに意味を直接に示しているのである。

Bhavabhaṭṭa の註釈は Jayabhadra のそれよりも簡潔であるが、今問題となっているタントラ本文の読みに関しては、PANDEY の版本による限りは、na hantavyā nirhetubhiḥ と読んでおり、nirhetu の意味を Jayabhadra の註釈同様に pramāṇa であると解釈している。

Cakrasaṃvaravivṛti ad Laghuśaṃvaratantra 26.12cd–13ab:

sāmānyam sarvatantṛāṇām katham eṣāṃ siddhikāraṇatvam ity
āha — **na hantavyā** na vadhyāḥ. kair ity āha — **nirhetubhir** han-
tṛbhiḥ. nirhetubhiḥ pratyakṣādibhiḥ pramāṇaiḥ. (E^P vol. 2, pp.
486–487)

当該偈頌は *Abhidhānottara* にも見いだせる。

Abhidhānottara Chapter 43:

sāmānyam sarvatantrānām na hantavyāni hetubhiḥ |
śraddhāmātreṇa grhyante na kareṇa na cakṣuṣā ||

● sāmānyam || I N; sāmānye T1; sāmānya T2

(I f. 139v3, N f. 179v2, T1 f. 146v1, T2 f. 172r5)

* 写本により章番号が異なる。I N T1 は ch.43, T2 は ch.45.

筆者がアクセスできた写本による限り、問題となっている箇所を読みは
na hantavyāni hetubhiḥ を支持している。

一方、チベット語訳に眼を向けると、*Padminī*, *Laghuśamvaratantra*,
Abhidhānottara のチベット語訳はそれぞれ以下の通りである。

Padminī Tib. chapter 1:

thun mong rgyud rnams thams cad kyi ||
gtan tshigs rnams *kyis (D; kyi P) gzhom bya min ||
dad pa tsam gyis gzung bya ste ||
mig dang lag par ma yin no ||
(P f. 8v, D f. 6v4)

Laghuśamvaratantra Tib. chapter 26:

rgyud rnams thams cad thun mong ste ||
rgyu med par ni gzhom mi bya ||
dad pa nyid kyis blang ba yi ||
mig dang lag pas ma yin no ||
(P ff. 78v8–79r1, D f. 231r6–7. See also GRAY 2012: 334)

Abhidhānottara Tib. chapter 46:

rgyud kun gyi ni thun mong ste ||
rgyu med pa ni gzhom mi bya ||

dad pa nyid kyis blang bya yi ||
 mig dang lag pas ma yin no ||
 (P f. 189r1, D f. 332v4)

チベット語訳から判断する限りは、*Padmini* は *hantavyāni hetubhiḥ* という読みを、*Laghuśaṃvaratantra* および *Abhidhānottara* は *hantavyā nirhetubhiḥ* という読みを支持していると考えられる。上述の通り、Ratnarakṣita の答論の文脈に適している読みは *hantavyāni hetubhiḥ* であるが(また、韻律の点からも好ましい読みである)、Ratnarakṣita が参照した経典の写本がそのような読みをとっていたのか、あるいは Ratnarakṣita が文脈に合うように改変したのかまでは判断がつかない。また、当該文献がいわゆる孫引きの場合も想定する必要があるだろう。

- (6) apparatus に示してあるように、当該偈頌は『宝性論 *Ratnagotravibhāga*』1.153 である。第 1 パーダの読み *śraddhayaivānugantavyaṃ* は『宝性論』にもとづく emendation である。*Ratnagotravibhāga* 1.153: *śraddhayaivānugantavyaṃ paramārthe svayaṃbhuvām | na hy acakṣuḥ prabhādīptam īkṣate sūryamaṇḍalam* || (E¹ p. 74).

『宝性論』においては「理解されるべきである」という意味で、*anugantavya* が使用される例は見られるが、*gantavya* の用例は見られない。また、写本の支持する読みである場合は、*atra* が *paramārthe* と同格になるが、この場合前後の文脈から判断して、この *atra* は特に必要とされない。これらの 2 点から『宝性論』にもとづき読みを修正している。

- (7) Saraha に帰せられる当該偈頌の典拠について、Ratnarakṣita は典拠を明示していない。この偈頌は *Kriyāsaṃgrahapañjikā* (第 6 章、第四灌頂のセクション) に引用されており、桜井宗信氏は当該偈頌を Saraha 著 *Svādhiṣṭhānakrama* (Ota. 3122, Toh. 2275) 第 11 偈に同定している(桜井 1992:)。

Svādhiṣṭhānakrama Tib. v.11:

blo yi yul min des na gang gi spyod yul min ||
gzhi yi gdam gyi rim pa bla mas gsungs pa ring ||
de yi rim pas snying rje la sogs yon tan dag ||
dad ldan rnam la snying gi gnas su rang nyid skye ||
(P f. 139v1-2, D f. 125v7).

Kriyāsaṃgrahapañjikā において当該偈頌は、*tad uktaṃ tantrāntare* に引き続き、*Apabhraṃśa* の偈頌とともに引用されている。この文言のみから判断すると、当該偈頌が何らかの経典所収のものであると見なされていた可能性がある。また桜井氏によれば、当該偈頌は *Vanaratna* 著 *Trayodaśātmakaśrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi* (Ota. 2204, Toh. 1489) の第 7 偈に相当することを指摘している (桜井 1992: 57, 註 41)。 *Trayodaśātmakaśrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi*: blo yi spyod yul ma yin pas na tshig gi gdags pa med || rgya chen po la bla mas gzhas pa gdam gyi 'jug pa gzhi || de ni rim gyis snying rje la sogs yon tan la 'doms te || dad ldan rnam kyi snying gi gnas su rang nyid 'byung ba yin || (P f. 182v3-4, D f. 183v1-2)

Kriyāsaṃgrahapañjikā (第 6 章、第四灌頂のセクション) に引用される当該偈頌の読みは以下の通りである。

buddher agocaratayā na girāṃ *pracāre*
dūre *gurū* prathitavastukathāvatāraḥ |
taṃ tu krameṇa karuṇādiguṇāvadāte
śraddhāvatāṃ hṛdi padaṃ svayam ādadhāti ||
(E^S p. 517)

引用中イタリック体で示された部分が、桜井氏が本校訂テキストと違う読みを採用する箇所である。桜井氏は「覚知の対象ではないから言葉を用いた表現中には [現われ] ず、[言葉より] 遠く離れているけれども、事

柄を表現する能力を備えているので明らかにしてくれる上師は、順に彼(=弟子)が悲心等の徳を浄化した時に、[それら]誠信を有する者達の心に、自ら直感的心象を刻み込む。」と訳している(桜井 1992: 37)。しかしながら、gurū が ādadhāti の主語であるならば、数が一致しないことになり、また第3パーダを locative absolute として理解するには若干無理があるように思われる。また、第3パーダの tu の位置からみて、偈頌の前半と後半はそれぞれ対の意味をなす文であると考えられる。

Kriyāsaṃgrahapañjikā の写本のうち、最も書写年代の古い3写本の読みは以下の通りである。N1: vuddher agocaratayā na girāṃ pracāre dūre gurupathitavastukathavatāraḥ | taṃ tu krameṇa karuṇādiguṇāvadāte śraddhāvatāṃ hṛdi vadaṃ svayam ādadhāti || (f. 90v3-4); N2: vuddher asocaratayā na girāṃ pracāre dūre guruprathitavastukathavatāraḥ | taṃ tu krameṇa karuṇādiguṇāvadāte śraddhāvatāṃ hṛdi padaṃ svayam ādadhāti || (f. 126r5-6); T: vuddher asocaratayā na girāṃ pracāre dūre guruprathitavastukathavatāraḥ | tan tu krameṇa karuṇādiguṇāvadāte śraddhāvatāṃ hṛdi padaṃ svayam ādadhāti || (f. 126r1-2)。当該3写本はいずれも第2パーダでは guruprathita- という読みを支持している一方で、第1パーダ、第3パーダではそれぞれ pracāre, taṃ (tu krameṇa) という読みを支持している。当該偈頌の読みが、当該3写本の支持する読み、すなわち buddher agocaratayā na girāṃ pracāre dūre guruprathitavastukathavatāraḥ | taṃ tu krameṇa karuṇādiguṇāvadāte śraddhāvatāṃ hṛdi padaṃ svayam ādadhāti || という読みであるならば、「guruprathitavastukathavatāraḥ は知覚の対象ではないので、[真実]から遠い言葉の領域にはない」という意味になってしまう。また第3パーダの taṃ の構文上の役割が不明瞭である。

さらに、苦米地等流氏によると当該偈頌は Samayavajra 作 *Pañcakramapañjikā* に引用されており、サンスクリット語写本は次のような読みを示すという。tathā cokaṭaṃ | buddher agocaratayā na girāṃ

pracā(26a2)[ro] dūre guruḥ prathitavastukathāvatāraḥ | ta<t> tu krameṇa
karuṇādiguṇāvadāte | śraddhāvatām hṛdi padaṃ svayam ādadhāti | (f. 26r1–
2) (*ta<t> の t は欄外に追記される。) 貴重な情報を頂いた苦米地氏に謝
意を表する。

当該偈頌の読みを確定するため、その直前の箇所を見ていくことで、
当該偈頌が引用される趣旨を見てみたい。

tat kenopāyēnotpādanīyam.

maṇḍalacakrādyupāyena svādhiṣṭhānakrameṇa ca
iti vistarāḥ. etac cāsmābhir na vivṛtam. kasmāt. yataḥ —
svasamvedyam idaṃ jñānaṃ vākpathātūtagocaram |
adhiṣṭhānapadam hy etat sarvajñajñānatanmayam ||
aparam uktam —

nānyena kathyate sahaṇaṃ na kasminn api labhyate |
ātmanā jñāyate puṇyād guruparvopasevayā ||
gurupādaprasādena mahāpuṇyavatām svayam |
yoginy utpadyate jñānaṃ vākpathātūtagocaram ||

tathā cuktam —

jayati sukhārāja ekaḥ kāraṇarahitaḥ sadodito jagatām |
yasya ca nigadanasamaye vacanadaridro babhūva sarva-
jñāḥ ||

tad uktaṃ tantrāntare —

ṇa taṃ vāe gurukahaiḥ ṇa taṃ vujjaiḥ sīsa |
sahajāvatthā amīa rasakāsu kahijaiḥ kīsa ||

(E^S pp. 516–517)

当該箇所では、弟子が灌頂で体験する真実あるいはサハジャ sahaja
は言葉を超えたものであること、またそのような真実は師の恩寵に
より証得されるものである、という趣旨が述べられている。これは、

Ratnarakṣita が当該偈頌を引用する趣旨とも概ね一致する。現時点で著者は、当該偈頌に関して校訂テキストで提示する読みを採用し、guruprathitavastukathāvatāraḥ を pracāro を形容する hetugarbhaviśeṣaṇa として理解する。【筆者による和訳】「[真実は] 知の領域ではないので、言葉の活動の場ではない。[なぜならば、言葉の活動の場とは、真実より] 遠くにある、師により [恩寵をもって] 明かされる事実 (vastu) への話による導入であるからである。しかしそれ [=真実] は、悲などの徳性によって順次に浄化されたとき、信を持つ者たちの心に、自ずと境地／足跡を刻み込む。」

最後に、*Padminī* チベット語訳における当該偈頌は以下の通りである。

blo yi spyod yul nyid min ngag gi spyod yul min ||
 bla mas bstan pa dngos po'i gtam ni rim por 'jug ||
 de ni rim gyis rnying rje la sogs yon tan dkar ||
 dad ldan snying gar go 'phang rang nyid sbyin par 'gyur ||
 (P f. 8v4-5, D f. 6v5-6)

Padminī チベット語訳でも第1パーダ、第2パーダにおいては、それぞれ pracāro, guruprathita- という読みを支持している。後者に関しては、*Svādhiṣṭhānakrama* および *Trayodaśātmakaśrīcakrasaṃvaramaṇḍalavidhi* も支持している。

- (8) asaṃbhavi || 3 写本はいずれも asaṃbhavo という読みを支持するが、ここで tad は bādhitva, あるいは直前の文の内容を指すと考えられるので、asaṃbhavi (あるいは asaṃbhavam?) という読みが適切である。Cf. dvītiyo 'pi pakṣo bhagavatya asaṃbhavī (2.2.1.2).
- (9) この直後にチベット語訳には、現存サンスクリット語写本に対応箇所のない、以下の文が続く。

phyogs gcig pa nyid la yang thams cad mkhyen pa nyid med do ||

gzhon nu ma'i pra ti se na'i shes pa lta bu dang | bden pa'i rmi lam
 gyi shes pa ltar dus dang phyogs mtha' dag na gnas pa'i dngos po
 phyin ci ma log par shes pa rnal 'byor pa'i ye shes so || de yang
 phyogs gcig nyid kho na ma yin te | gzhan du na yun ring po dang
 'das pa la sogs pa *'ga' zhig (D; 'ga' zhag P) rtogs pa med do ||
 (P f. 9r5–7, D f. 7r4–5)

【和訳】部分性にはまた一切智者性はない。[一切智智とは]少女の憑代 (pratisenā) の知識のように、そして真実の夢の智のように、あらゆる時と場所に存在する事物を顛倒なく知る瑜伽行者の智である。それはまた、部分性では決してない。さもなくば、長い時間とか過去とかいうものは、[一切智智によって] 理解されないだろう。

当該セクションは、1.1 に見られる「持金剛位が作り出されるものであるならば、それは消滅するか、時間・場所が限定されるものである」という反論に対する答論であるが、チベット語訳にのみ存在する箇所がなくとも、現存写本の 2.2.1.1 が論難に答えていること、また、チベット語訳にのみ存在する箇所が当該セクションの文脈に合わないことの 2 点から、チベット語訳にのみ存在する箇所は付加であると考えられる。

⁽¹⁰⁾ tasyā nirmāṇakāye prabandhanitye saṃbhavāt || この読みは *Sādā-mnāyānusāriṇī* により支持される: nirmāṇe vikāro 'sty evecchātah (f.2v5).

参考文献

1. 一次文献

a. サンスクリット語文献

Abhidhānottara. MS I: Institute for Advanced Studies of World Religions, MBB I-100; MS N: NGMPP Reel No. E695/3; MS T1: The Tokyo University Library No. 10 (New Number); MS T2: The Tokyo University Library No. 12 (New Number).

Kriyāsaṃgrahapañjikā by Kuladatta. MS N1: NAK 4-318 = NGMPP A934/10; MS N2: Kaiser Library Acc. No. 109 = NGMPP C11/15; MS T: The Tokyo University Library No. 117 (New Number). For these manuscripts, see TANEMURA 2004: 100, 103 and 桜井 SAKURAI 1996: 496. MS N1 = N in TANEMURA 2004 = N5 in 桜井 SAKURAI 1996; MS N2 = N6 in 桜井 SAKURAI 1996; MS T = T3 in TANEMURA 2004 = T6 in 桜井 SAKURAI 1996.

Cakrasaṃvarapañjikā by Jayabhadra. See 杉木 SUGUKI 2001.

Cakrasaṃvaravivṛti by Bhavabhaṭṭa. See *Laghuśaṃvaratantra* E^P.

Tattvasaṃgrahapañjikā by Kamalaśīla. E^K: Embar KRISHNAMACHARYA (ed.) *Tattvasaṅgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the Commentary of Shri Kamalaśīla*, Baroda: Oriental Institute, 1984 (volume 1) and 1988 (volume 2). 2. volumes. Gaekwads's Oriental Series 30, 31. E^{Sh}: Swami Dwarikadas SHASTRI (ed.) *Tattvasaṅgraha of Ācārya Shāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Shri Kamalashīla*, Varanasi: Bhauddha Bharati, 1968. 2 volumes. Bhauddha Bharati Series 1.

Padminī, a commentary on the *Saṃvarodayatantra* by Ratnarakṣita. 写本資料については本論文「写本資料および略号」を参照。チベット語訳につい

ては下記「チベット語訳文献」を参照.

Pramāṇavārttika by Dharmakīrti. See *Pramāṇavārttikālaṃkāra* below.

Pramāṇavārttikālaṃkāra by Prajñākaragupta. E^S: Rahula SĀṆKṚITYĀYANA (ed.) *Pramāṇavārtikabhāṣyam or Vārtikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta: Being a Commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavārttikam*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1953. Tibetan Sanskrit Works Series 1. *Ratnagotravibhāga*. JOHNSTON, E. H. (ed.). *The Ratnagotravibhāga Mahayanottaratantrasastra*, Patna: The Bihar Research Society.

Laghuśaṃvaratantra (a.k.a. *Herukābhidhāna*). E^G: GRAY 2012. E^P: Janardan Shastri PANDEY (ed.) *Śrīherukābhidhānam Cakrasaṃvaratantram with the Vivṛti Commentary of Bhavabhṭṭa*. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies. Rare Buddhist Texts Series 26. 2 vols.

Vākyapadīya by Bhartṛhari. IYER, K. A. Subramania (ed.) *Vākyapadīya of Bhartṛhari with the Commentary of Helārāja*, Kāṇḍa 3, Part 1, Poona: Deccan College, 1963.

Sadāmnāyānusāriṇī. A commentary on the *Śaṃvarodayatantra* by an anonymous author. MS: NAK 3-716, vi. bauddhatantra 83 = NGMPP Reel-no. A48/11

b. チベット語文献

rGyud kyi rgyal po dpal bde mchog nyung ngu. Translation of the *Laghuśaṃvaratantra*. Ota. No. 16, *rgyud*, vol. *kha*, ff. 58v8–96v1; Toh. No. 368, *rgyud 'bum*, vol. *ka*, ff. 213v1–246v7.

mNgon par brjod pa'i rgyud bla ma. Translation of the *Abhidhānottaratantra*. Ota. No. 17, *rgyud*, vol. *kha*, ff. 96v3–227v7; Toh. No. 369, *rgyud 'bum*, vol. *ka*, ff. 247r1–370r7.

bCu gsum gyi bdag nyid dpal 'khor lo sdom pa'i dkyil 'khor gyi cho ga.

Translation of Vanaratna's *Trayodaśātmakaśrīcakraśaṃvaramaṇḍalopāyikā*.

Ota. No. 2204, *rgyud 'grel*, vol. *pa*, ff. 160r7–185v8; Toh. No. 1489, *rgyud*, vol. *zha*, ff. 161r4–185v7.

Rang byin gyis brlab pa'i rim pa. Translation of Saraha's *Svādhiṣṭhānakrama*.

Ota. No. 3122, *rgyud 'grel*, vol. *tsi*, ff. 138v4–139v7; Toh. No. 2275, *rgyud*, vol. *zhi*, ff. 125r3–126a6.

2. 二次文献

a. 和文

小川英世. 2007. 「Vākyapadīya 「〈能成者〉詳解」(Sādhanaśamuddeśa) の研究 — VP3.7.45–54: 〈目的〉(karman) 論序 —」『比較論理学研究』5, pp. 23–44.

桜井宗信. 1992. 「*Kriyāsaṃgrahapañjikā* の灌頂論(4): 第四灌頂, 和訳と註解」『智山学報』41, pp. 33–57.

桜井宗信. 1996. 『インド密教儀礼研究 — 後期インド密教の灌頂次第 —』京都・法蔵館.

杉木恒彦. 2001. 「『チャクラサンヴァラタントラ』の成立段階について: および Jayabhadra 作 *Śrīcakraśaṃvarapañjikā* 校訂梵本」『智山学報』50, pp. (91)–(141).

種村隆元・加納和雄・倉西憲一. 2016a 「Ratnarakṣita 著 *Padminī* 第1章前半 — Preliminary Edition および註 —」『川崎大師教学研究所紀要』創刊号, pp. (1)–(33).

種村隆元・加納和雄・倉西憲一. 2016b. 「密教経典を権威づける — Ratnarakṣita 著 *Padminī* 第1章前半和訳 —」*Acta Tibetica et Buddhica* 9, pp. 123–144.

種村隆元・加納和雄・倉西憲一. 2017 「Ratnarakṣita 著 *Padminī* 第13章傍論前半 — Preliminary Edition および註 —」『川崎大師教学研究所紀要』2, pp. (1)–(34).

渡辺照宏. 1982. 「摂真実論序章の翻訳研究」『渡辺照宏仏教学論集』東京・筑摩書店, 1982, pp. 57–77. 初出：『東洋学研究』2, 1967, pp. 15–27.

b. 欧文

GRAY, David B. 2012. *The Cakrasamvara Tantra (the Discourse of Śrī Heruka) : Editions of the Sanskrit and Tibetan Texts*. New York: American Institute of Buddhist Studies. Treasury of the Buddhist Sciences Series.

<キーワード> Ratnaraksita, *Padminī*, preliminary edition, 第1章傍論, 持金剛位, vajradharatva

本論文は平成29年度科学研究費「密教思想と他の仏教思想との関係性 — ヴィク라마シーラ寺院の学僧の著作群を中心に —」(基盤研究(B) 課題番号26284008, 代表：久間泰賢) による研究成果である。